

その翌年、西郷は又、赦されている。
ふつうなら、久光によって抹殺されても仕方のない西郷が、何故二度も赦されたのか。
たった一人の家来を殺すことができないくらい、封建君主の力は衰えていたのだろうか。

こんな話がある。
当時、西国の雄藩長州の藩主毛利敬親は、陰で「そうせい候」と呼ばれていた。

幕末、藩内において佐幕派、勤王派が交互に権力を持ち、藩の方針が、その時々で変わった。伺いをたてられた藩候はどの場合も「そうせい」と言ったところから、そういう陰口を言われたらしい。

明治の時代になって、伯爵となった敬親は、藩主当時のことを次のように述懐している。

「**そうせいと言わなかったら殺されていたな**」

幕末は、藩主達にとっても苦労な時代だったのである。
それに似たような事情が薩摩藩にもあった。

一つには当時の政治状況がある。

西郷が沖永良部島に送られた翌年(1863年 文久3年)、久光は藩兵を率いて再度京に上り、会津藩と共にクーデターを起こし、長州並びに尊攘派公卿を一掃(七卿落ち)、朝議を一変させた。

久光は、その功をもって官位を得、一橋慶喜、松平慶永、山内容堂らと参与会議を構成、公武合体の支配を強固たらしめんとした。

しかし、この参与会議も意見調整がスムーズにゆかず、内部崩壊してしまう。

そして、藩外尊攘派より「薩賊会奸」と非難不信の声が高まっていた。

このような政治的なゆきづまりと共に、生麦事件がきっかけとなって起こった薩英戦争で奮戦し、発言力を増した誠忠組の若い藩士達の、西郷赦免上申が効いている。

彼らは、切腹覚悟で久光に迫っている。

当時は言葉だけではなく、切腹といえは本当に腹を切ったらしい。これは久光からすれば相当な強迫（プレッシャー）だったろう。

自分の側近以外の藩の大勢が、又しても西郷復帰を熱望している。自分が嫌っていることを承知の上申。

若い藩士達のことを僭越とも思い、苦々しく思ったであろう。しかし自分のとった公武合体案が暗礁に乗り上げ、藩外が薩摩藩に不信感を持ち始めているような状況の中で、久光は“実力者”西郷を赦さざるを得なかった。